

1 はじめに

接続詞「そして」には、ものごとを列挙する次のような用法がある。

①本、鉛筆そしてノートを持参しなさい。

②家、土地そして家財を売却する。(ともに西谷元夫(1973)掲載例)

こうした用法の発生について、西谷元夫(1973)は、「従来の日本語の表現にはなかったもので、外国文学の移入により、いわゆる翻訳調が生まれたものと考えられる」と述べている。この指摘は、明治期をさしてのものと考えられるのであるが、現状では、明治期における「そして」の使用実態が必ずしも明らかにされているとは言いがたいため、①②を含めた「そして」の諸用法が、実際にどの程度用いられていたのかがはっきりとはしていない。

そこで、本稿では、翻訳児童文学作品の調査にもとづいて、明治期の接続詞「そして」がどのように用いられていたのかを考察してみることにしたい。

2 「そして」の意味・用法の整理および問題の確認

調査内容等を述べるに先だって、準備として、まず、「そして」の意味・用法の整理を行い、ついで、西谷氏の言及をふまえて、問題(調査目的)の確認をもう少し詳細に行うことにする。

2-1 「そして」の意味・用法の整理

本稿では、長田久男(1970)、松井利男(1970)を参考にして、「そして」の意味・用法を以下のように二種五類に整理する(注1)。

○「そして」の意味・用法

I. 「そして」の前件と後件との間に順序性がある場合。

(a)前件Aの結果として順当に後件Bがでてくることを示す。「Aその結果B」と解釈できるもの。

例；雨がやんだ。そして青空が広がった。(三省堂『例解国語辞典』第五版)

(b)前件Aと後件Bの時間的なつながりを示す。「Aその次にB」と解釈できるもの。

例；彼は玄関の前に立った。そしてベルをおした。(三省堂『例解国語辞典』第五版)

II. 「そして」の前件と後件との間に順序性がない場合。

(a) 一つのことからの上にもう一つのことからが重なることを示す。「A それに加えてB」と累加的に解釈できるもの。

例；くじらは、魚にそっくりな形をしていますが、けものなかまである証拠をたくさん持っています。そして、初めからあのような形ではなかったのです。(長田久男(1970)掲載例)

(b) 二つのできごとを対等の関係でならべる。「主語1…述語1 + そして + 主語2…述語2」のようにできごとを対等の関係でならべ、「A一方(また)B」と解釈できるもの。

例；フランス人は考えたあとで走りだす。そして、スペイン人は、走ってしまったあとで考える。(長田久男(1970)掲載例)

(c) 複数のものごとを列挙する。

例；京都、大阪、そして神戸を旅行してきた。(作例)

以上のように分類し、本稿以下では、これにしたがって考えていくことにする。

2-2 問題の確認

次に、西谷元夫(1973)の言及を見たうえで、調査目的とも言える問題の確認を行ってみたい。

西谷氏は、2-1で分類したII c (例；京都、大阪、そして神戸を旅行してきた。)について、

- (1) 彼は図書館へ行き、そして読書をした。
- (2) 雨が降りました。そして土地をうるおしました。
- (3) 本、鉛筆そしてノートを持参なさい。
- (4) 家、土地そして家財を売却する。

等の例文をあげて、次のように述べている。

「そして」は本来、「そうして」のつまったものであり、「そう」(副詞)、「し」(動詞)、「て」(助詞)の三単語から構成されている複合の接続詞である。「そうし」は前にある動作をさし示し(右の例文(1)では「行き」をさし、(2)では「降り」をさす)、「て」は次に接続させる接続助詞である。従って、前例

の(3)において、「本・鉛筆」と「ノート」とを接続させたり、(4)の「家・土地」と「家財」とを接続させることには無理があることがわかる。

前記(3)(4)の用例は、従来の日本語の表現にはなかったもので、外国文学の移入により、いわゆる翻訳調が生まれたものと考えられる。

英語の場合、接続詞andが、単語と単語、句と句、節と節、文と文などを結びつける働きをしていて、前後に同類又は反対の語(句・節・文)を置いて接続するが、前後のものは名詞であってもかまわない。しかし、日本語の「そして」は英語の「and」とは本質的に異なるのである。例えば、

He has a pen, a pencil and a sheet of paper. の訳として、

A彼はペンと鉛筆と紙とを持っている。

B彼はペンと鉛筆、そして紙を持っている。

の二つが考えられるが、Aの方は前述の理由により正しい訳であり、Bの方は翻訳調ではあるが、前述の理由により誤訳(これらの例に置いて、日本語としての「そして」の用法が誤りであるということ)と考えるべきであろう。

(原文縦書き)

さて、こうした説明を見ると、次のような二つのことを考えさせられる。

まず第一に、外国文学の移入によって発生したとされる「本、鉛筆そしてノート」のようなⅡcの表現が、当時どれほど受容されていたのかということである。

二葉亭四迷訳『あいびき』(明治21年)には、

③世には一種の面貌が有る、自分の観察したところでは、常に男子の気にもとる代り、不幸にも女子の気に適う面貌が有るが、この男のかおつきは全くその一ツで、桃色で、清らかで、そして極めて傲慢そうで。(CD-ROM版『新潮文庫明治の文豪』による。15頁)

といった、累加的なⅡaの発展とも、あるいは、列挙的なⅡcの萌芽とも考えられるような用例を見ることができる。こうした用例を見ると、その延長として、「本、鉛筆そしてノート」のようなⅡcの表現も行われていたのかもしれないと考えられたりもするが、しかし、一方で、同じ四迷の『浮雲』(明治20年)では、「そして」20例が「I b…19例、Ⅱa…1例」のように用いられていて、そこにⅡcを見ることはできない(CD-ROM版『同』による)。西谷氏は、Ⅱcを「誤訳と考えるべき」とするが、そうした誤訳ともいえるべき表現が、実際にどの程度受容されていたのかは追究の必要があるように考えられるのである。

ついで第二としては、西谷氏がふれていないⅡ a、Ⅱ bの使用実態はどのようなものであったのかということがある。④～⑧のような類似性を感じる用例を見ると、筆者には、Ⅱ cの受容は、Ⅱ a、Ⅱ bの存在と無関係ではないように考えられてくるのであるが、西谷氏は、こうした用法については言及をしていない。

④彼女は明るく、そしてよく気をつく人です。(作例、Ⅱ a)

⑤桃色で、清らかで、そして極めて傲慢そうで。(=③、Ⅱ aに該当と判断)

⑥鳥が鳴き、そして、花が咲く。(松井利男(1970)掲載例、Ⅱ bに該当と判断)

⑦日本の二大都市は、東京そして大阪である。(松井利男(1970)掲載例、Ⅱ cに該当と判断)

⑧京都、大阪、そして神戸を旅行してきた。(作例、Ⅱ c)

筆者などは、Ⅱ cの受容は、Ⅱ a、Ⅱ bの広まりと相まって進むのではないかと考えているため、これら二つの使用実態もⅡ cとともに追究する必要があるように思われてくるのである。

このように、西谷論文は、結果的に、明治期の「そして」の使用実態はどのようなものであったのかという問題を喚起するものとなっている。氏の「外国文学の移入により、いわゆる翻訳調が生まれた」という言葉は、明治期の翻訳作品では、Ⅱ cをはじめとする「そして」の各用法が、どの程度使用されていたのかという問題をも、また、示していると考えられるのである。

そこで、本稿では、こうした点を調査、考察してみたいと思う。

3 調査について

3-1、調査資料

今回の調査では、次の翻訳児童文学作品21編を調査資料とした。このうち、作品1～20については、川戸道昭・榊原貴教編『明治期アンデルセン童話翻訳集成 全5巻』(1999年、ナダ出版センター)を使用し、作品21『小公子』については、川戸道昭・榊原貴教編『復刻版 明治の児童文学 翻訳編』第三巻(1999年、ナダ出版センター)を使用した。

〈小クラウスと大クラウス〉の話…4編

作品1『二人むく助』尾崎紅葉訳(明治24年3月)

作品2『小九郎と大九郎』教育資料研究会訳(『教授材料話の泉』明治37年3月)

- 作品3『小九郎次大九郎次』菅野徳助・奈倉次郎訳（明治40年1月。英文付き）
- 作品4『お伽劇二人黒助』佐藤紅緑訳（少年界 明治43年6月）
〈皇帝の新しい着物〉の話…9編
- 作品5『王の新しい衣装【翻刻】』ヤスカシユヅウ訳（Romaji Zasshi明治19年11月）
- 作品6『不思議の新しい衣装』巖本喜治訳（女学雑誌 明治21年3月10日）
- 作品7『領主の新しい衣装』坪内逍遙訳（『国語読本』明治33年10月）
- 作品8『狂言衣大名』杉谷代水訳（早稲田文学 明治39年3月）
- 作品9『着道楽』菅野徳助・奈倉次郎訳（『小九郎次大九郎次／着道楽』明治40年1月。英文付き）
- 作品10『裸の王様』木村小舟訳（『教育お伽噺』明治41年10月）
- 作品11『裸体の王様』和田垣謙三・星野久成訳（『教育お伽噺』明治43年10年）
- 作品12『霞の衣』上田万年訳（『安得仙家庭物語』明治44年4月）
- 作品13『皇帝のお召物』近藤敏三郎訳（『アングアゼンお伽噺』明治44年4月）
〈マッチ売りの少女〉の話…7編
- 作品14『可憐の燃木売』はやし家竹葉訳（智徳会雑誌 明治27年2月）
- 作品15『まっちゃん』太田玉茗訳（文芸倶楽部 明治29年11月）
- 作品16『マッチ売の娘』百島冷泉訳（福音新報 明治36年7月16日）
- 作品17『まっちゃんの光』相馬御風訳（明星 明治36年9月）
- 作品18『マッチ売』菅野徳助・奈倉次郎訳（『反魂鳥』明治40年8月。英文付き）
- 作品19『マッチ売娘』和田垣謙三・星野久成訳（『教育お伽噺』明治43年10年）
- 作品20『燐寸売の小娘』近藤敏三郎訳（『アングアゼンお伽噺』明治44年4月）
〈小公子〉…1編
- 作品21『初出 小公子』若松賤子訳（女学雑誌 明治23年8月～25年1月）

なお、これらの作品を選んだ理由は以下の通りである。

まず、翻訳資料という点については、先掲西谷元夫（1973）の「外国文学の移入により、いわゆる翻訳調が生まれた」という言及を考慮したためである。

また、児童文学作品の選択については、以下①～③のような考慮の結果である。①子どもの作文には「そして」が多いという経験的知識から、児童文学作品では「そして」が現れやすいのではないかと予想した。②〈小クラウスと大クラウス〉、〈皇帝の新しい着物〉、〈マッチ売りの少女〉については、英文付きのものがあり（作品3、9、18）、「and」の訳を適宜確認できることが見込まれた。③先行研究では、調査が

男性作家の作品に偏っている様子があり、それが懸念されたために、若松賤子訳『小公子』の使用を考えた。また、同作品については先行研究がある程度存在することから、今後の考察においても有益なのではないかとも考えた。

なお、『明治期アンデルセン童話翻訳集成 全5巻』には、この他に、以下の四編も同内容のものとして載っているが、これらについては、「而して」等、読みの確定ができない表記で用例が現れてくるために、今回は、調査対象からはずすことにした。

『帝ノ新ナル衣装』渡辺松茂訳（『ニューナショナル第五リーダー直訳』明治21年6月）

『諷世奇談』高橋五郎訳（言文一致 明治36年9月）

『小髯燧火木売ノ女兒』河瀬清太郎訳（『ニューナショナル第三読本直訳』明治19年2月）

『小髯引火奴売の童女』元木貞雄訳（『ニューナショナル第三読本直訳』明治20年7月）

3-2 調査内容および調査結果

以上の作品を資料として、今回は次のような調査を行った。

○調査内容；作品1～21について「そして」の使用の有無を確認する。そして、見出された用例については、先のⅠa～b、Ⅱa～cにしたがって分類し、その使用実態を見る。

そして、この調査の結果をまとめたものが、次の表1、表2である。表2は用例の見られた8作品について作成している。

表1 「そして」の使用の有無

	作品数（作品番号）
「そして」が見られる	8編（作品2、3、4、10、12、13、17、21）
「そして」が見られない	13編（作品1、5、6、7、8、9、11、14、15、16、18、19、20）

表2 翻訳児童文学作品における「そして」の使用実態

作品	「そして」の 用法		前件後件に順序性有			前件後件に順序性無		
	I a (A結果B)	I b (A次にB)	II a (A加えてB)	II b (A一方B)	II c (列挙)			
小公子 (明23~25)	9(1)例	50(2)例	14(5)例	10(2)例	1(1)例			
まっちの光 (明36)	0(0)	2(0)	1(0)	0(0)	0(0)			
小九郎と大九郎 (明37)	1(0)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)			
小九郎次大九郎次(明40)	0(0)	3(1)	0(0)	0(0)	0(0)			
お伽劇二人黒助 (明43)	0(0)	2(1)*	0(0)	0(0)	0(0)			
裸の王様 (明41)	0(0)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)			
霞の衣 (明44)	0(0)	3(0)	0(0)	0(0)	0(0)			
皇帝のお召物 (明44)	0(0)	1(0)	1(0)	0(0)	0(0)			

表注1 () は会話例数。したがって、9(1)は「9例。うち会話1例」となる。

表注2 *の内の一つは以下のようにやや特殊。老媪「さうかい。禍も三年といふから
なア、ぢや腐らぬ内に直ぐ脱ぐがよい、そして馬は何処にある?」

4 考察

さて、こうした調査結果からは、次のようなことが考えられる。

まず、表1を見ると、用例の見られない作品が13編あることから、「そして」の使用には、作家(訳者)・作品によって偏りのあることがわかる。これは、京極興一・松井栄一(1973)が、明治・大正・昭和の小説16作品を調査して指摘する内容と一致している。したがって、このことから、明治期の「そして」については、それを用いる書き手とそうでない書き手がおり、その状況は、日本の小説の場合でも翻訳作品の場合でも同様にあてはまるといえることがわかる。

次に表2を見てみると、「そして」の各用法自体は、すでに『小公子』の時期において、ある程度発達してきていると考えられる。II a、II bもそれぞれ用例が見られ、

Ⅱcについても、

- ⑨「骨柄の立派な事、そして小馬に跨がった塩梅は、丸で、騎馬武者かなんぞのいせいでネ」(小公子第十一回 女学雑誌286号 明治24年。使用資料149頁。「」は引用者による)

といった用例をひとまず見ることができる。しかし、この⑨は、二つのものごとを列挙的に示すという点では先掲⑦(「東京そして大阪」)に似るところがあるものの、「本、鉛筆そしてノート」のような、名詞そのものを結びつけて列挙する形には、なお一步隔たりがあるようにも考えられる。そのため、これはⅡcの確例と見るよりも萌芽的の用例と見て慎重に考えるほうが適切である。したがって、各用法のうちⅡcについてのみは、まだ十分な使用が認められないと見るのが妥当と考えられる。

ついで、表2の『小公子』以降のアンデルセン童話7編に目を移すと、そこでは「そして」の使用が必ずしも盛んではない。文章量の違いは考慮する必要があるが、それでも用法の多様性という観点からは、『小公子』よりもむしろ低調といった様子が見えがえる。この場合、アンデルセン童話では、そもそも文脈的に「そして」を使用できないのではないかという懸念が生ずるのであるが、しかし、その心配は、大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集』(1984年改版、岩波文庫)に載る「そして」の各用法の用例を見ることで払拭される(注2)。したがって、これらの場合は文脈的には使用可能でありながらも、実際には「そして」があまり使用されていないと見ることができる。そして、このことに、「そして」が見られないアンデルセン童話が13編あることをあわせて考えてみると、今回調査したアンデルセン童話作品20編では、「そして」は、先行の『小公子』ほど多様には用いられていないと考えられてくる。

そして、以上を総じてみると、明治中期以降(『小公子』以降)の「そして」は、Ⅱc以外の用法は出そろっていたものの、その使用となると、言語主体(書き手)の使用についての個性—「そして」自体を使うか使わないか、使うとすれば各用法をどの程度使うかという個性—に左右される状況にあったと考えられる。簡明に言えば、書き手まかせの状況にあったと考えられるのである。そして、さらに考えてみると、そのような書き手まかせの使用が可能であったということは、当時の「そして」は、まだ今日ほどには頻用されていなかったのだらうと察せられてくるのである。

また、「本、鉛筆そしてノート」のようなⅡcについては、条件付きの一例(先掲⑨)を除くと、今回の調査資料では皆無であった。外国文学の移入により発生したとされる用法ではあるが、しかし、それらも、容易に見つかるほどには使用されていなかったということがわかる。ただ、これについては、これで明治期の存在自体が否定さ

れたわけではないので、今後も用例の追求が必要であると考えられる。

5 おわりに

以上、翻訳児童文学作品の調査にもとづいて、明治期の接続詞「そして」の使用について述べた。今回は、限られた作品の調査であるので解釈は慎重を要するが、それでも、明治期の「そして」の使用の有無は言語主体に左右されることや、翻訳作品においてさえも翻訳調とされる「名詞A、名詞Bそして名詞C」は容易には見られないことなど、明治期の使用実態の一端を示すことができたのではないかと考える。今後は調査を広げるとともに、今回ふれられなかった「そうして」との関係を見ながら考察を展開していくことも考えている。

最後に、先の表2で数値として扱った用例を用例資料1、用例資料2として稿末に示す。追認の可能性を保証する意味では全例をあげることが望ましいのであるが、量的に困難であるので、その一部を示しておくことにする。

注

1 基本的には拙稿(2000)の分類と同様であるが、Ⅱ類については、意味・用法の説明部分を若干改め、一部の用例を変更している。

2 大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集』(1984〈昭和59〉年改版、岩波文庫)では次のような用例を見ることができる。

《Ⅰa (Aその結果B)に該当するもの》

○そのころ町じゅうの人は、その織り物が、どんな不思議な性質を持っているかということをも、もう知っていました。そして、自分のお隣さんが、もしや悪い人か、ばか者ではないだろうか、とても知りたがっていました。(「皇帝の新しい着物」同童話集(一)159頁)

《Ⅰb (Aその次にB)に該当するもの》

○その二けんの家をあいだのすみに少女はからだをちぢめて、うずくまりました。そして、小さい足を、からだの下にひっこめました。(「マッチ売りの少女」同童話集(二)302頁)

《Ⅱa (Aそれに加えてB)に該当するもの》

○それは、たいへん寒い日でした。雪が降っていました。そして、あたりはもう暗くなりはじめました。(「マッチ売りの少女」同童話集(二)301頁)

《Ⅱb (A一方B)に該当するもの》

○この役僧は、主人が留守だと知って、おかみさんに、こんにちは、を言いに来たのです。そして、親切なおかみさんの方でも、ありったけのごちそうを出したのです。(「小クラウスと大クラウス」同童話集(一)24頁)

また、作品3には、「roast-meat, fish, and wine」という表現があり、これなどは「焼き肉、魚、そして葡萄酒」といったⅡcの訳の可能性も考えられる(実際には「焼き肉や、魚や、葡萄酒」と訳されている)。こうした用例から、本稿で扱ったアンデルセン童話は、「そして」の各用法を使用しうる文脈であると考えられる。

参考文献

- 梅林博人(2000)「近代小説に見る接続詞『そして』—翻訳調といわれるAそしてBをめぐって」『国文学解釈と鑑賞』65巻7号 至文堂
- 京極興一・松井栄一(1973)「接続詞の変遷」『品詞別日本文法講座6』明治書院
- 田中章夫(1984)「接続詞の諸問題—その成立と機能」『研究資料日本文法④』明治書院
- 長田久男(1970)「接続詞小辞典口語編—そして②」『月刊文法』第2巻第12号(10月号 特集・接続詞のすべて)
- 西谷元夫(1973)「表現上の問題点二つ その一 『…ならないさきに』 その二 接続詞『そして』の用法」『解釈』5月号
- 松井利男(1973)「接続詞小辞典口語編—そして①・そうして」『月刊文法』第2巻第12号(10月号 特集・接続詞のすべて)
- 森岡健二(1999)『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』明治書院(246~247頁)

付記 本稿は、第192回近代語研究会(2002.2.23.於実践女子大学)で発表した内容を再検討し、その一部をもとにあらたに稿を成したものである。発表の席上および発表後には、多数の方々から貴重なご意見をいただいた。記してお礼申し上げます。なお、本研究は、相模女子大学平成13年度特定研究助成費(A)[研究課題「接続詞『そして』の研究」]による研究成果の一部である。

(うめばやし ひろひと・相模女子大学助教授)

用例資料 1

- ・表2の『小公子』の用例の一部をあげる（肝要とみられるⅡ類から、Ⅱa 5例、Ⅱb 3例をあげる。Ⅱcは既出⑨）。なお、用例の引用に際して旧表記をあらためたところやルビを省略したところがあることをお断りしておく。以下同様。

《Ⅱa（Aそれに加えてB）に該当するもの》

- 幼子の戯れ声のせぬホームの空気は、殊に冷たく、宛がら下宿屋の心地がし升。そして其家の夫婦は、相互に、又世の同胞に対して、多少寛優ならぬ所があるのは往々見る事です。（「小公子」の序 女学雑誌288号 明治24年）
- 其時おつかさんのお顔はまだ青ざめてゐて、綺麗なお顔の笑靨がスッカリなくなつて、お目は大きく、悲しそうで、そしておめしは真ツ黒な喪服でした。（小公子第一回 女学雑誌227号 明治23年）
- 「（あの子を一補引用者）出来る丈の注意をして育てましたに、ソシテ他に何の楽しみもない私にとってハ、他人には分からぬほど大事な子で御座り升のに……、」（小公子 第二回女学雑誌230号 明治23年。「」は引用者による）
- 「仰の通り、子供の為には結構なことで御座りませう。そしてアノ侯爵様はまさか子供が此母を嫌ふ様にはお仕付遊ばす事もあるまいかと存じられ升。」（小公子第二回 女学雑誌230号 明治23年。「」は引用者による）
- 誰が何をしたの噂を此おかみさんが知らぬ程の事ならば、別段話しにならぬのだと人に思はれる位、世間が明るいのでした。そしてお城の事は尚さら、自分の妹が奥づとめの女中で、それが又給事のタマスには別して懇意でしたから、何もかも承知して居つたのでした（小公子第七回 女学雑誌276号 明治24年）

《Ⅱb（A一方〈また〉B）に該当するもの》

- 僕は始め思つたよりか今侯爵になりたく候此お城は大変綺麗で僕みんなが大變好だからで候そして大層金があれば色々なことができるからで候（小公子第十二回 女学雑誌292号 明治24年）
- ホ氏は此一條につけて新たに起つた自分の大責任に壓倒されて殆んど夢中の躰でした。そして、ヂックの威勢もイザ討ち出さうといふ塩梅でした。（小公子第十四回 女学雑誌296号 明治24年）
- フォントルロイ殿の誕辰を祝ふ当日は亦豪義な事でした。そして若君は殊に大喜びでした。（小公子第十四回 女学雑誌296号 明治24年）

用例資料 2

- ・表 2 の『まっちの光』『小九郎と大九郎』『小九次郎と大九次郎』『お伽劇二人黒助』『裸の王様』『霞の衣』『皇帝のお召物』の全用例をあげる。

《I a (Aその結果B) に該当するもの》

- 小九郎は、一週間中大九郎のために働いて、自分のたった一引疋の馬を貸してやらなければなりません。ところが大九郎の方は、沢山の馬でもって加勢するものですから、一週間の中で、ただ一日だけかしてやればよかったです。そして大九郎の方は、五疋の馬を日曜日だけ貸してやる訳でした。(『小九郎と大九郎』教育資料研究会訳 明治37年)

《I b (Aその次にB) に該当するもの》

- やがて、少女は家と家との間にある狭い軒陰へ匍ひ込んで、悲しさうに座った、そして、暖める気でもあらう、凍かんだ手を膝の下へさしこんだ(『まっちの光』相馬御風訳 明治36年)
- 其焼鳥は俄に跳ね出して、皿から飛び落ちた。そして肉刺とナイフを胸にさされたまゝ、此哀れな少女を慰め顔による／＼と歩いて来るのであつた(『まっちの光』相馬御風訳 明治36年)
- (大九郎は、川に一補引用者) 小九郎を投げ込んだ積りで、家に帰って行きました。そして帰り途で四辻の所に来ましたら、投げ込んだと思って居た小九郎が、沢山の牛を連れて来るのに出会いました。(『小九郎と大九郎』教育資料研究会訳 明治37年)
- (小九郎次は一補引用者) 後ろの席に老祖母を乗せた、そして林の中をやって行った。(『小九郎次大九郎次』菅野徳助・奈倉次郎訳 明治40年)
- 『滅相なこと!』と、薬屋は云った、『お前さんは発狂してる! そんなことを云ふもんぢやない、お前さんの首が剣呑ですぞ。』そして薬屋は、大九郎次の所業の恐ろしいことを云って聞かせ、(『小九郎次大九郎次』菅野徳助・奈倉次郎訳 明治40年)
- 『袋をあけて呉れ』と、小九郎次は叫んだ、『そしてわしの代りに此の中にお遣り、さうすりや手もなく極楽へ行かれるよ。』(『小九郎次大九郎次』菅野徳助・奈倉次郎訳 明治40年)
- 小黑「えゝ、えゝ、だから今となつてはあきらめるより仕方ありません、それで彼馬の皮だけでも、金にすることにしませう、町へ売りに歩いたら何処かで買者も

有りませう。」／老嫗「さうかい。禍も三年といふからなア、ぢや腐らぬ内に直ぐ脱ぐがよい、そして馬は何処にある？」(『お伽劇二人黒助』佐藤紅緑訳 明治43年。「」は引用者による)

○靴屋、鞆皮屋其他四五人やツて来ました、而して値段を付け初めめました(『お伽劇二人黒助』佐藤紅緑訳 明治43年)

○(王様は一補引用者)少しでもお金があれば、みんな衣服を買って仕舞ひ、そして美しく着飾着飾つて、外へ出て遊ぶのを何よりの楽しみとしていらつしやいました。(『お伽劇二人黒助』佐藤紅緑訳 明治41年)

○『承はって恐悦至極に存じまする』と、織屋どもは云った。而して二人は色合の名を陳べ立て、模様の特徴を講釈に及んだ。(『霞の衣』上田万年訳 明治44年)

○ところで二人の詐欺師は、其仕事を続けるため、金糸や、絹や、黄金を場、又もや請求に及んだ。而して相変らず残らずこれを着服して、糸一本だつてにはつけずたゞ例の通り空機で織りつゞけて居る体を粧つて居るのだ。(『霞の衣』上田万年訳 明治44年)

○天子さまや二人の大官がみた以外には何にも見えぬが、それでも尚天子さまの通りに、『あゝ、非常に見事でござる!』と云った。而して一同は、やがて挙行さるべき大名行列の折りに此新調の美服の着初を遊ばさるゝ様に御勧めまをした。(『霞の衣』上田万年訳 明治44年)

○二人の詐欺師は経も緯もない織機で、懸命に仕事を急いでゐる手真似をしてみました、そして、皇帝がお召連れになつた臣下等の内には、先日の総理大臣も御家来もみましたが、お互ひに織物の眼に映らぬのを悟られまゐと思ひますから、『如何で御座る! (中略一引用者)』などゝ誰に云ふとなく鼻を蠢かしながら、自分達の眼には反物が見えると人々に思はせ様と、織機を指差しながら饒舌つていました。(『皇帝のお召物』近藤敏三郎訳 明治44年)

《II a (Aそれに加えてB)に該当するもの》

○『これがお股衣で、これがお背心で、これがお上衣にござります、そして蛛網のやうに花車で軽い織物で御座りますから、一寸手に持ちましては何も持つてゐない様ですが、点(後略一引用者)』(『皇帝のお召物』近藤敏三郎訳 明治44年)

○無数の燭光は其緑の枝の間に輝いて居つて、其間には沢山の美しい絵が結びつてある、そして其等の物は凡て一心に少女を見下ろして居るやうに見える。(『まっちの光』相馬御風訳 明治36年)